

## 題目 適応方略はいつつくられる？—中学・高校時代の経験が成人の心理に与える影響—

氏名 川崎 香穂里

指導教員 結城 雅樹

人の心理・行動は社会環境から影響を受けて形成されるが、現在だけでなく、過去の社会環境からも影響を受けるのではないか。先行研究では、現在の心理・行動に影響を与える社会環境特性として、現在暮らす社会における関係流動性（対人関係選択の自由度）だけでなく、過去の関係流動性もあると示唆されている。小楠・結城 (2019) では、ある環境への適応方略を身につけた後で別の性質を持つ環境に移動した際、どれだけ柔軟に適応できるのかを検討した。その結果、大学 1 年生は高流動的な環境にあり、高流動性社会出身者ほど現在高い自尊心や一般的信頼を持ち、現在の対人関係満足度が高かった。しかしこの研究には、1) どの発達段階で適応方略を身につけるのかが明らかでない、2) 自尊心、一般的信頼、自己開示以外の心理変数は検討されていない、3) 関係流動性以外の社会環境特性による心理・行動への影響は検討されていない、4) 低流動性社会から高流動性社会への移動以外は検討されていないという 4 点の限界がある。そこで本研究では、関係流動性を含む多様な社会環境特性と、それらを青年期で経験した成人の心理との関連を検討した。そのために、18 歳以上の日本人 209 名を対象とし、中学・高校時代の学校環境や親子関係の性質、現在暮らす社会の関係流動性、現在の心理について尋ねるオンライン調査を実施した。その結果、低流動的な学校環境にいた人ほど現在の拒否回避傾向が高く、現在高流動性社会にいる人ほど調和追求傾向が高かった。中学・高校時代の上下関係が厳しかったり、親子関係が良好であったりした人ほど現在の調和追求傾向が高く、当時の親子関係が良好であったり、現在の経済水準が高かったりした人ほど高い自尊心を持っていた。中学・高校時代に頻繁に叱られる環境であったり、親子関係が良好であったりした人ほど現在のポジティブ評判追求傾向が高く、当時の親子関係が良好であった人ほど現在の一般的信頼やネガティブ評判回避傾向が高かった。高校部活動に所属した人はしなかった人よりも現在の調和追求傾向、自尊心、一般的信頼、ポジティブ評判追求傾向が高く、中学部活動に所属しなかった人の中では高校部活動に所属した人が、高校部活動に所属しなかった人の中では中学部活動に所属した人が、現在の自尊心、一般的信頼が高かった。以上より、現在だけでなく青年期の社会環境もまた、成人の心理・行動に影響を与えることが示唆された。